

〈小学生の部 優秀賞〉

わたしに出来ること

日野小学校 六年 三輪 奈々花

「見学いいですか」と私は部屋をのぞいた。

「こんばんは、中へどうぞ」と手話で案内され、席に座った。今年の夏、手話サークルに参加した。きっかけは姉の存在。

姉は小さいころ、聴力を失い、ろう者となった。母は必死に手話を勉強したと言っていた。父と私は母に通訳を頼んだり、大きな声と身振り手振りで口を見せながら会話していた。

四年生になったころ、家にあった使い古した手話辞典を見つけた。母が勉強したように、私も勉強を始めた。少しずつ、少しずつ手話を覚えて、姉と話せることも増えていった。

姉は五歳で人工内耳の手術を受けた。それまで使っていた補聴器では十分に音が聞き取れず、言葉を覚えるのが難しかったから、手術をしたと聞いた。手術は一歳前後でするものらしいが、姉は病気もあり、手術が遅れた。手術の時期

が遅かったこと、人工内耳をしても、健聴者のように聞こえないことから、姉にとって手話は、必要なコミュニケーションの手段となった。

人工内耳の効果で静かな場所で聞きなれた人の言葉は、聞き取れることもあるが、屋外やショッピングモールなどの雑音が多いところでは、必ず、手話が必要となる。

姉の両耳には人工内耳がついている。補聴器よりも大きいため、目につきやすい。そのため、どこへ行っても、いろいろな人がジロジロと見てくるのを感じる。手話をする、さらに見てくる人は多くなる。珍しいものを見るような周りの視線。指をさされたり、こちらを見ながらコソコソ話す人もいる。家族の会話が減ってしまう。母の表情が少し硬くなるのを感じる。気にしなくていいと思っても、全く気にならないわけではない。悪いことしていないのに、嫌な気分になってしまう。その視線に悪意がなくても、本人や家族は余計なことまで考えてしまう。

私が過ごした幼稚園では、同じクラスに体や言葉が不自由な子がいた。もちろん、他のクラスの中にもいて、みんな一緒に過ごしていた。当然のようにみんな助け合っていたし、

困っていれば、先生を呼んでいた。それが普通だった。小学校になると、その子たちは、特別支援学校や支援級に入り、一緒に過ごす時間は減っていった。小さいころから健常者も障がい者も一緒に時間を過ごすことでお互いの事を知ることが大切なことだと思う。障がい者とはなれて過ごす環境こそが、珍しいものを見るような視線になっていくのではないだろうか。

ろう者や盲者、身体障がい者、知的障がい者、背が高い人、低い人、太っている人、やせている人、色々な人がいる。その方たちが、ジロジロ見られたり、指をさされたり、心無い言葉で外出をひかえたりすることがあれば、本当に悲しく思う。実際、父や母も姉との外出で心無い言葉を言われたり、指をさされたり、悲しい思いをしたことが何度もあったと話してくれた。私も悲しくなった。姉のことを通して、私自身も自分の振るまいを見直し、考えるようになった。そして、私は外出先でも堂々と手話をすることにした。聞こえないことは恥ずかしいことではないし、指を指されるようなことでもない。姉は私の大切な家族だから、私は何を言われても大丈夫。

今の私に出来ることは、少しずつ覚えてきた手話を上達させること。そのための第一歩が手話サークルに参加することだった。

サークルに来ていた人たちは、聞こえる健聴者の方ばかりで、講師の方だけがろう者だった。皆さんとても楽しそうに手話で話していた。私は会話を目で追うのが精一杯で、自分のスピーチはほとんどできなかったけど、こんなにも多くの人が手話を学んでいたことがうれしかった。姉の味方になってくれる人がいることが本当にうれしかった。

今年の十月に手話検定と一緒に受けようと母が言ったので、自分のためにも手話検定を受けることにした。

まだまだ勉強不足、たくさん勉強して、周囲にも認めてもらえるぐらい上達したら、いつか手話ボランティアに参加しようと思う。どんな人も住みやすく、お互いを認め合えるような社会になるように、自分に出来ることを少しずつやっていきたい。